

地域医療は再生する 病院総合医の可能性とその教育・研修

松村理司 編著

＜書評者＞ 岩田健太郎（神戸大学教授・感染治療学/
神戸大病院感染症内科診療科長）

本書の編著者である松村理司先生は一貫して優れた総合医であることをめざし、優れた総合医を育てることに尽力してきた。そして、疲弊の激しい中小病院の勤務医が優れた病院総合医であれば、現在の「医療崩壊」（松村先生的に表現するならば「病院崩壊」）の問題は解決に向かうのではないかと主張している。本書の主旨である。

医療の質という面では病院勤務医はまだまどうまく機能できてはいない。検査過剰、「木を見て森を見ない」と称されるマイクロな医療をぐるぐる回しても、超高齢化社会を迎え、患者の様相が複雑化し、また診療の目的すら明確でなくなる日本の医療に明瞭なヴィジョンを持ち得ないだろう。そのヴィジョンを個々の優れた病院総合医が持てば診療の質は高まり、それがひいては病院という組織の、そして国の医療のあり方の改善につながっていく。松村先生は本書で数々の医療政策に対する提言を行うが、「国がこうすればよいのだ」というトップダウンの、「おかみ丸投げ」ではない。徹底してボトムアップの思想である。そし

てそれを具現化しているのが洛和会音羽病院である。

音羽病院は卒後臨床研修環境において日本で最も優れた環境を持っている（International Journal of Medical Education 1:10-14, 2010）。ちなみに上位10施設中、大学病院は弘前大学病院ただ1つだけである。大学病院から人が出ていったのは初期臨床研修「制度」のせいではない。大学病院が研修医を引きつけるだけのリソースと魅力を持っていないからなのである。制度はただ、それを顕在化させただけなのである。

優れたシステムもすべては「ひと」からなる。形式だけ整えても構成員個々の能力や意欲が伴わなければ絵に描いた餅である。古典的な日本の医療システムにおける「美点」（例えばフリーアクセス）も、それは個人の、特に勤務医の過剰な献身によるぎりぎりの綱渡りな状態がもたらしたものであった。それが限界を迎え、「立ち去る」状態になる。「医療崩壊」という言葉が生まれる。

日本医療の質はよいか？ このような「イエス・ノー」的な回答

を促す問いは子どもじみている。アメリカと日本のどちらの医療が「まし」か？ これも大人げない議論である。他者との比較でしか自己を規定できない人は哀れである。（他国はさておき）「日本の医療のどこに問題点があり、さらなる改善点があるか？」こそが問われるべき大人の命題だ。そして病院診療における改善点は山のようにある。われわれは毎日毎日、日本の病院診療の欠点をみせつけられている。

本書は重層的に、多角的に日本の病院総合診療のあり方を、そして病院診療のあり方を提言する。提言は実に具体的でマイクロなものだ。カンファレンスのあり方、診断プロセスのあり方、女性医師のあり方に始まり、労務管理や給与の問題、果ては音羽病院における狂犬病診断の顛末から脚気の「森-高木論争」に至るまで、実に多彩な議論が展開される。その根底には、一貫して優れた総合医とはなにか、育てる手段はいかに、という問いが流れている。著者の魂がこもっており、読者の魂も揺さぶられる。

●A5 頁304 発行2010年
定価2,940円
(本体2,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01054-2]
医学書院刊